



よろい  
甲を着た古墳人だより



## 祭祀遺構の発見

平成24年11月に「甲を着た古墳人」が発見された4区では、乳児(2号人骨)、首飾りの古墳人(3号人骨)、幼児(4号人骨)が相次いで姿をあらわしました。さらに、この調査区の北西部からは大量の土器や玉類が出土する祭祀遺構が発見されたのです。

円形に巡る幅10cmほどの溝に囲まれたなかに「コ」の字形に甕や壺を配列し、その周りに杯などが重ねて置かれているのです。その数は調査した部分だけでも600個におよび、周囲からは臼玉、管玉、ガラス玉、勾玉なども9000点以上出土しました。

さらに、「乳文鏡」という青銅鏡や短甲を模した「短甲形石製模造品」といった特筆される遺物も出土しました。そして、他遺跡の祭祀遺構の調査例と比較して当時貴重品であった須恵器の占める割合が高いことも大きな特徴となつたと思います。金井東裏遺跡の祭祀遺構は出土遺物の質、量ともかなり高いものであることがわかります。



祭祀遺構全景(右が北)

## 円形周溝は囲いの跡？

直径 5.5 m、幅 10 cm の溝が円形にめぐり、その内側から多くの土器が出土しています。

この溝には 6 世紀初頭の榛名山ニッ岳火山灰の最初の噴火の火山灰は堆積せず、溝の内側の土器群や溝外には最初の火山灰が降り積もっているのです。このことから、祭祀の場には円形に囲う柵状の施設があった可能性が想定できることとなります。



円形にめぐる溝と「コ」の字形に並び甕や壺

## 大形の甕や壺を「コ」の字形に置く

大形の甕や壺が「コ」の字形に並べて置かれていました。出土数は 70 個ほどになります。さらに、その中央部には須恵器の大甕が 4 個置かれていました。

そしてこの部分に重ねた杯などが多数置かれますが、出土土器には当時貴重品であった須恵器が他遺跡に比べ多いことが特徴的です。この祭祀遺構の性格をものがたる特徴だといえます。



須恵器の大甕の出土状況 壁面は祭祀遺構を覆う火砕流層

## 杯を重ね置き、供え物を置く

杯が数個から十数個重ねて置かれています。出土した杯は総数は 600 個にもおよびます。また多数の滑石製白玉、石製模造品やガラス玉と共に鉄器なども出土しています。石製模造品の中には「短甲形石製模造品」と呼ばれる甲を模した貴重なものも含まれていました。鉄器には鋤・鎌などの農具もあり、農耕に関わる祭祀が想定されます。さらに「乳文鏡」と呼ばれる径 5.68 cm の青銅鏡も 1 面出土しました。



大量に重ねられた杯の出土状況



「乳文鏡」出土状況



杯に入れられた鉄斧



出土した勾玉



短甲形石製模造品